



Title	コミュニティの変容過程とボランティアに関する総合的研究
Author(s)	渡邊, としえ
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42228
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 ^{わた}渡 ^{なべ}邊 ^{とし}とし ^ええ

博士の専攻分野の名称 博 士 (人間科学)

学 位 記 番 号 第 1 5 9 1 4 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 13 年 3 月 23 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

人間科学研究科行動学専攻

学 位 論 文 名 コミュニティの変容過程とボランティアに関する総合的研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 大 坊 郁 夫

(副査)

教 授 池 田 寛 助教授 渥 美 公 秀

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、阪神大震災（1995年1月17日）の被災地で実施したフィールドワークを、コミュニティとボランティアに焦点を当て、グループ・ダイナミックスの観点から考察した。阪神大震災によって破壊されたコミュニティは、様々な人々の動きによって変容を遂げ、ボランティアもその変容過程において重要な役割を果たした。本論文では、コミュニティの変容過程と、その過程におけるボランティアの動きについて論じた。

第1部「理論編」では、本論文の理論的背景を述べた。まず、第1章では、本論文が依拠する理論的立場を明らかにした。自然科学に追随し主客二元論的認識に依拠していた従来のグループ・ダイナミックスに対して、近年、様々な批判や異議が唱えられ、抜本的な見直しを迫られている。本章では、本論文がGergen (1994) による社会構成主義や、廣松 (1982) の共同主観的認識論、杉万 (1996) による集合性の理論を理論的基盤とし、人間科学としてのグループ・ダイナミックスの立場をとることを示した。

第2章では、コミュニティとボランティアに関する先行研究をそれぞれ概観した上で、本論文の先行研究における位置を明らかにし、目指す方向を示した。コミュニティに関する先行研究の大半は、コミュニティ概念には地域性と共同性の2つの要素が含まれることに関して同意しているものの、コミュニティを静的で、固定化されたものとして捉える傾向が強く、コミュニティを動的に捉えようとする研究が、すぐれたものがいくつかあるものの、少数であった。本論文では、グループ・ダイナミックスの観点から、コミュニティを固定化されたものではなく、その境界線自体が常に変容しているものと理解した上で、その過程を明らかにすることを目的とした。一方、ボランティアに関する先行研究の大半は、ボランティア個人に焦点を当て、ボランティアの動機やボランティアたりうるための基本原理（自発性、無償性、社会性など）に関する議論であった。そして、ボランティアを社会変容の中に位置付けて考察する研究は、すぐれたものがいくつかあるものの、少数であった。本論文では、ボランティアを切り口にして社会変容を考察することを目的とした。

第2部「実践編」では、阪神大震災の被災地で展開されたコミュニティの変容過程とその過程におけるボランティアの動きを3つの事例から論じた。まず、第3章では、西宮市安井小学校避難所の発災から避難所閉所までの約6ヶ月間の組織化過程を、避難者・施設スタッフ・救援ボランティアから成る「トライアングル・モデル」という枠組みで整理した。本避難所の場合、震災以前からの活発なコミュニティ活動を基盤として、避難者と施設スタッフとの連携を軸に組織化が進行した。本章から、避難所は、単なる食料や寝場所を確保する場ではなく、避難者が震災によっ

て破壊された集合性を再構築するための安全基地として重要であることを指摘した。

第4章では、第3章に引き続き、西宮市安井地域における約4年間のフィールドワークから、震災後に形成された2つの創発的な組織（「ファミリー安井」、「安井まちづくり協議会」）の組織化を軸に展開するまちづくりを検討した。そして、複数のまちづくりが時間的・空間的に併存し、螺旋的に変容することが例証された。また、川瀬光一街づくりプロデュース研究所（1989）による「都市計画学」と「まち創造学」、中村（1992）による〈近代の知〉と〈臨床の知〉という概念、および、渥美（1998）による「集合的即興ゲーム」論を援用し、近代化を遂げた豊かな社会について展望した。

第5章では、阪神大震災の被災地において非営利組織が既存の地域組織と連携して展開している地域防災プログラムを事例にして、コミュニティ変容に関わるボランティアについて検討した。震災以前にも様々な地域防災活動は行われてきたが、地域防災を直接の目的として掲げるような活動「地域防災を唱える地域防災」だけでは不十分であることが震災によって露呈した。本章では、従来の地域防災とは異なる枠組みによる「地域防災とは言わない地域防災」の実践を報告し、グループ・ダイナミックスの観点から考察した。そして、「〇〇とは言わない〇〇」というフレーズが、フィールドの集合性を変容させる生成力をもったものであったことを指摘した。

第3部では、「総合論議」として、グループ・ダイナミックスにおけるコミュニティとボランティアについて考察した。第6章では、コミュニティとボランティアについて、第2部のフィールドワークによって明らかになったことを整理した。まず、コミュニティは、客観的に存在するものではなく、静的なものではないということが明らかになった。次に、ボランティアは、阪神大震災から約6年の間に変容を遂げたことを示した。阪神大震災以前には、ボランティアが災害救援やまちづくりなどの活動に参加することが違和的であったのが、阪神大震災を契機にして、それほど取り立てて新奇なことではないと思われる状態へと、ボランティアをめぐる状況は変化していった。

第6章第2節では、今後のコミュニティとボランティアについて、第2部で提示したトライアングル・モデルと「〇〇とは言わない〇〇」というフレーズによって改めて整理し、今後の展望を述べた。前者より、今後ますますボランティアが様々な形でコミュニティ変容に関与することになったときには、ボランティアは、自身がトライアングルを構成する集合体の一つであり他の集合体との関係に十分に留意することが大切であるということと、ボランティアや住民などをコーディネートする非営利組織の役割が重要になってくると指摘した。一方、後者からは、高度経済成長を遂げた「ゆたかな社会」を背景にして、コミュニティとボランティアに関して、ある種の回帰が起こっていることを指摘した。つまり、喪失した生きがい感を取り戻すためにコミュニティ活動への関与や、ボランティア活動への参加が過剰に称揚される傾向が現代社会には見られる。しかし、過剰な期待や理想化によって、本来即自的な行為で〈臨床の知〉に支えられている「〇〇とは言わない〇〇」としてのコミュニティやボランティアの特徴が阻害されてしまう恐れがあることを指摘した。

最後に、第6章第3節では、グループ・ダイナミックスとしての本論文の意義について論じた。本論文は、社会構成主義に依拠することにより、フィールドの集合性に変化を与え、フィールドの人々が「さらなる明日への一步を踏み出す」のを助けることができた点において意義があったとした。具体的には、第3章のトライアングル・モデルや第5章の「〇〇とは言わない〇〇」というフレーズによって、フィールドの人々やそれ以外の人々が現状を改めて理解したり、新たな活動を展開し始めるなど、彼らの集合性に影響を与えた。本論文の意義は、生成力のある理論に基づいたモデルやフレーズを提示して集合性の変容に寄与したことであり、これは、本論文が、理論と実践の統合を図るアクション・リサーチを強調し、「よき理論ほど実践的なものはない」というLewin（1951）の言葉を堅持した人間科学としてのグループ・ダイナミックス研究に他ならないことを示すものであった。

論文審査の結果の要旨

本論文は、阪神大震災の被災地におけるコミュニティとボランティアの変容過程をグループ・ダイナミックスの立場に立ったフィールドワークを通して検討したものである。本論文では、救援期・復旧期の避難所の組織化、復興期のまちづくり、平常時における地域防災活動の3つのフィールドワークに基づき、フィールドの当事者たちの実践を

促進するための理論を産出することに焦点を当てた。詳細なエスノグラフィーをもとに、「〇〇とは言わない〇〇」というフレーズを導きだし、コミュニティとボランティアが変容していく過程を理論的に整理した。

本論文は、その学問の草創期から理論と実践との統合を強調し、アクションリサーチを志向してきたグループ・ダイナミックスの姿勢を堅持した研究であったと言え、博士（人間科学）の学位の授与に十分に値するものであると判定された。